

## 龍源寺の歴史について(三)

松原 泰道

龍源寺は、以前に龍翔院と称えたのを、当寺五世の住持、正天禪師に參禪した奥平昌成公の法名に因み、今から二百二十七年前に、「龍源寺」と改めたことは先号に述べましたが、正天禪師は宮中から紫衣をたまわった名僧でありました。

この名僧に禪を問うた昌成公は、昌章公の末子で元禄七年十一月に江戸で生れましたが二才にして父を亡くされたので、宇都宮九万石の家督をつぎ、四才の時に又も国替えて宮津九万石に転じ、更に二十四才には豊前中津十万石に封じられました。

昌成公は、このように幼くて父を亡くしただけでなく、三人の姉と一人の兄とも早く死別されたことが記録に記されてあります。情

にもろい江戸っ子の公の心を、どのように大きくゆさぶったかが想像されます。父や兄や姉を恋うて墓参されるうちに、いつとはなしに名僧正天禪師の室に入つて參禪されるようになったのでありましょう。

この事は、禪師にさしあげた公の書簡を見ると、いかに求道の熱意に燃えたかが、よくうかがわれます。公はまた詩をよくし、晩年には「徳翁」と号しました。ある年の名月の夜に、美しく輝く月光を浴びて『江湖風月集』という書物をひもときながら

江湖秋月たちまち円成す。

風水鉄船波浪平らかなり。

密々たる通風、脚下を看よ。

悠然たる眼底に宇宙明らかなり

と、禅境を吐露しておられます。

等寺には、昌成公の画像(軸物)一幅が伝わっています。賛は公の作ですが近臣の筆で

逼塞す乾坤向上の氣。  
吹毛劍また全威を露わす。

百則の公案那処にかある。

珊瑚坂上月依々たり

と記されてあります。

龍源寺の護持に力をつくした公は五十二才で死去されました。

その後も、奥平家の龍源寺護持の念あつく中屋敷の建具を寄進されたり、文久年間には上屋敷の東御殿を寄進されました。然し、各建造物は今は残っていません。僅かにオランダ屋敷といわれた中屋敷の建具数枚を見うけるに過ぎません。

この仏縁により、大正年間までは奥平家から香花料が届き、使者も参拝されましたが、その後は音信も絶えております。然し、たいせつな龍源寺開基さまでありますので、毎年十二月一日の開山忌恆例法要に、昌成公の画像とお位牌に、ご供養申し上げております。